思い出二題

西　田　龍　雄

この11月に京大附属図書館は創立百周年を迎える由、誠に慶賀にたえません。

私は平成４年３月に定年退職しましたが、同時に館長の任期も終り、図書館を去りました。前後２期６年の間、いろいろの方々のご支援をいただきましたこと改めてお礼申し上げます。館長時代の思い出というテーマを与えられましたので、就任した初めの年度に起った残念な事件と任期終了前にあった嬉しい思い出を一つづつ記してみたいと思います。

昭和62年の年頭、祝賀気分がまだ抜けきらない１月８日に、目録カードが何者かに奪われ投棄されたという知らせがありました。当時は電算機による目録検索はまだ軌道にのっていない頃で、図書管理の要であったカードが２千枚近くも構内数カ所で前後４回にわたって投げ棄てられたのです。大きい衝撃で誠に遺憾でした。その頃の緊迫した学内情勢の中で、可能な限りの探索が行われた結果、ある程度の背景はつかめました。この事件は計画的なある意図のもとに行われたものではなく、結局は妙な結末になったように記憶します。岩井部長から受け取った詳しい記録が手許にあったのですが、いつのまにか紛失してしまいました。ともかく各部局のご協力のお陰でことがそれ以上に拡大しなかったのは不幸中の幸いでした。

嬉しい方の思い出は、退職の前年秋の恒例の展示会で「東アジアの文字と文献」を企画してもらったことです。それまでの展示会と違ったところと言えば、小冊子の解説目録を作って配布したことでしょう。毎回解説目録の要望がよせられていましたが、それを実現したのです。当時洋書目録掛長であった谷口敏夫氏（現在光華女子大学助教授）が連日おそくまで作業を進めてくれましたお陰で小冊子はB４判21頁の簡潔な体裁にでき上がりました。研究室の家本太郎氏や文学部の数名の教官にもご協力いただきました。

裏表紙には文学部所蔵のロロ文字写本の一頁をもってきました。これは貴重本の指定を受けていませんが、新村出先生の時代に購入した極めて珍なる書で、日本のどの図書館にも類似の品はないと思います。まだ内容の決定はできていませんが、おそらく四川省の彝族が古い彝（イ）文字を使ってたて書きにし右から左に行を移して書いたもので△印に朱を入れた独特の句点も見られます。古ぼけた外装をもったその実物も展示しました。

表紙はロロ文字と並ぶ納西（ナシ）文字にしたかったのですが、その経典の実物はどこにもありませんので、私が先年雲南省麗江で入手し持ち帰った納西の絵文字の一枚を使うことで同意を得ました。これは最近の作で決して貴重なものとは言えませんが、裏打ちしましたので見栄えのある形になっていました。「舞踏を教える殿様蛙」と名付けました。

納西族の間では地球上にもっとも早く出現した生物は金色の大蛙であると言い伝えられており、人類の踊りはその蛙の跳躍にヒントを得てできたものと考えています。また1980年に麗江県立図書館の書庫で納西族の古い踊りを詳しく解説した２冊の書物が発見されています。それらに因んで誰かが納西文字風に蛙の踊りを書いたのでしょう。

この展覧会は好評の中に終わったと記憶しますが、初日の夕方に開かれたパーティで当時大阪大学の館長をしておられた越田教授から蛙にはペニスはない筈だがとご指摘を受けました。この生物学者の眼力には参りました。よくよく見るとこの蛙には黄金のお臍もついているではありませんか。わが家の家宝となったこの絵文字はそののち『京大広報』の表紙になり、私の退休記念に造ったテレホンカードにも使いましたが、その部分を隠すわけにもいかず、急所とお臍を出して登場しています。

今年の６月に、蛙の故郷麗江を再度訪れまし

た。大地震のあと町はすっかり変貌していて旧市街には多少昔の面影があるものの、大きい近代建築が立ち並んでいました。それでも市街地を30分ほど離れると昔ながらの石畳があり、長い旧家の塀に沿って静かに流れる小川のきれいな水で納西族のおばさんが野菜を洗っている長閑な風景も残っていました。

時代の大きい流れの中でつねに変わらないもの不動のものがあるようです。それらは変えてはならないものであるかも知れません。

京大附属図書館の益々のご発展を祈念いたします。

（にしだ　たつお：元附属図書館長）

京都帝国大学附属図書館
（明治32年竣工）

物資不足の中で昭和23年
に完成した附属図書館

現在の附属図書館
（昭和58年竣工）